

新年度(2013)総会開催

全議案承認される一懇親会も賑やかに

2月10日(日)に野菜ダイニング菜宴において、奈良日仏協会2013年度総会が開催され、坂本会長の議事進行のもと、2012年度の活動報告・会計報告・監査報告がなされ、原案通り承認されました。各行事は順調に実施できたが公式ホームページにおける仏語併記や日本文化の発信について不十分だった旨補足ありました。次に決算報告では予算超過支出の費目に関する理由と繰越金の年々の漸減傾向への対応について説明されました。

役員選出では、前期の全役員の留任と新理事・中浦東洋司^{とよし}氏の新任が承認されました。(新役員表は下記に掲載)

続いて2013年度の活動計画・予算計画が発表され、原案通り承認。次に濱事務局長から、今後の協会活動計画について下記にそって説明がなされました。

(1)理事会と運営委員会 (2)日仏文化交流活動 (3)フランス語普及の為の活動支援 (4)会員親睦行事 (5)文化活動 (6)他の団体との提携強化 (7)広報活動の充実 (8)会員相互の交流支援 (9)創立20周年記念事業に向けての準備。これらの活動計画を発展的にを行い、奈良から発信する日仏文化交流をより深めていくことを確認しました。また、かつてのフランス語ガイドクラブの活動再開を望む意見が出されました。なお、予算は親睦行事に関する費用が前年度実績に比べ大幅に削減されています。

最後の議題として法人会員の年会費を5,000円に値下げする会則の改訂が提案され、承認されました。これは自営業の方々の入会促進の措置です。

新年度 雑感 坂本 成彦 (会長の新年度あいさつ要旨)

二月も半ばを過ぎ、なお寒さ厳しい日が続きますが、当協会も新年度を迎え新たな第一歩を踏み出しました。この1~2年随分世の中が変ってきて、何か時代の節目にいたるような気がいたします。

世界の主な国々を見渡しますと、中・露・仏・韓・日などのトップが交代し、北アフリカの旧植民地諸国では、依然として紛争が続く、一部は我が国にも影響を与えました。また日本周辺の諸国でも次々と難題が出てまいり、安定への道は遠いですが、日本はまだまだ豊かで“平和ボケ”に安穩としている面が大変懸念されるところです。

当協会は、今後ともその趣旨であるフランス・フランス語圏との友好、親善、文化交流を深化させ、国際的視野から物事を冷静に眺め、会員相互の親睦を深めつつ、充実した皆様の交流活動を支援して参りたいと考えております。

会長：坂本成彦、副会長：三野博司、ジャメ オリヴィエ、濱 恵介、事務局長：濱 恵介（兼任）、
理事（会計）：樋口順一、理事：野島正興、浅井直子、中野愛弓、三木正義、森井桂子、仲井秀昭、
井田眞弓、中浦東洋司 監事：南城 守（敬称略、順不同）



懇親会風景

会員名簿・メーリングリスト(M-L)の更新

<<<事務局からご協力のお願い!!>>>

会員名簿を更新する時期になりました。記載事項に変更のある方は3月15日までにFAX0743-52-3939 ないしEメール afjn_info@kcn.jp にて、変更内容をお届けください。同時に会員メーリングリスト（以下ML、連絡用の一斉送信リスト）も最新の状態に修正いたします。会員名簿に掲載されるEメールアドレスはそのままMLに登録されますが、名簿への掲載をせずにMLに登録することも可能です。

(その場合「MLにのみ登録」と明記ください)

名句の花束 フランス文学の庭から <25> 三野博司

Mon cœur est bon, mais je suis un monstre.
心はやさしいが、わたしは野獣なのだ。
(ジャン・コクトー『美女と野獣』(1946))

(副会長・奈良女子大学教授)

ディズニーのミュージカルやアニメで知られている「美女と野獣」の物語は、18世紀フランスのボーモン夫人の童話がもとになっています。子供向け教育事典『子供の雑誌』に収められた16篇の教訓物語の一つであり、1857年に発表されました。ボーモン夫人は、各地に伝えられた「美女と野獣」を主題にした伝承を17頁の短い物語にまとめあげ、これが後世の規範となり、今日まで読み継がれています。ただ、「美女の野獣」話の原型はローマ時代にまでさかのぼります。2世紀、アプレイウス『黄金のろば』のなかの「クピドーとプシュケー」のなかには、ヒロインが美しい末っ子であり、怪物が美しい青年に姿を変えろという「美女と野獣」の基本類型がすでにあります。



さて、コクトーもまた少年時代からボーモン夫人の童話を愛読し、1946年映画『美女と野獣』La Belle et la bête を制作しました。多才な彼は、みずから脚本を書くだけでなく、監督も務めています。友人のジャン・マレーが主役の野獣に扮し、名花ジョゼット・デイが美女を演じ、そこに、音楽担当のオーリック、衣装と美術担当のベアールなど、フランス映画界の一流のスタッフが参加しました。パリ近郊のラレーにある古城で撮影され、ボーモン夫人の原作に見られた18世紀の宮廷恋愛は、20世紀の美しく荘厳な光と闇からなる映像空間へと移し替えられたのです。

ボーモン夫人の原作では、野獣はベルに向かって、自分はただ単に醜いだけではなく、知恵がなくてバカなのだと言います。他方で、二人の姉たちは、それぞれ美貌の男と才気煥発の男と結婚するのですが、結局は不幸になります。ベルこそが、そうした外見に惑わされず、誠実で愛情深い伴侶を選ぶ目をもっており、父の良き娘であることを貫いた報酬として幸せな結婚を手に入れるのです。

原作に基づきながらも、コクトーはいくつかの改変を行いました。人間の内的な獣性を外面へと投影させて、特殊メイクを用いて異様な外貌を作り出しました。最初の出会から野獣の恐ろしさが強調されており、その姿を見てベルが気絶するほどです。けれども、次第にベルの強いまなざしの力が野獣を手なずけていきます。ここでは、みずからの獣性におびえ、醜さに悩む野獣の姿がむしろ痛々しく感じられます。人はみな自分の醜い面を隠して生きていますが、彼は愛する女性の前でみずからの醜悪さを晒していなければならないのです。



Mon cœur est bon, mais je suis un monstre.

Il y a bien des hommes qui sont plus monstrueux que vous, qui le cachent.

ベート（野獣） 心はやさしいが、私は野獣なのだ。

ベル あなたよりもっと野獣に近くて、しかもそのことを隠している人間は、いっぱいいるわ。

ここでベルは、人間たちが隠している野獣性を見抜く力を示しています。

コクトーは、原作にはない人物として、ベルに言い寄るアブナンを作り出しました。マレーがアブナンと野獣の両方を演じることによって、美貌ではあるが中身のないアブナンと、醜いが心優しく誠実な野獣の対比が浮き上がり、この二人が反転することになります。コクトーらしい合わせ鏡のような反転を用いて、彼は人間の獣性とはなにかと問いかけるのです。なお、この映画は、戦後日本で公開されたフランス映画の第一号でもありました。

《あこがれのロンシャン礼拝堂へ》

藤井 裕子

はじめまして。この度、縁あって奈良日仏協会に入会させていただきました。どうぞよろしくお願い致します。仏語を習得しようと思いついたそもそものきっかけは、字幕なしで映画をたのしみたいがためでした。「ゴダールが待ってるからがんばらなくちゃ」、細々と独学で始めたわけですが、徐々に世界も広がり、今では人々とのコミュニケーションや文学、そして語学自体もなかなかおもしろいものだなあと感じています。去年は、ついに念願叶ってフランスへ旅立ちました。20世紀初頭、多くの芸術家がパリを目指しました。彼らにならって私もペンとスケッチブックを携えてフランスに向き合ってみることにしました。

パリのチュイルリー公園は、いくつもの彫像が広場を丸く取り囲むように配置されています。チェスプレイヤーが彼を囲むように、居並ぶ複数の対戦者を順々に相手していくように、私も一体につき数分単位で描き進めていきました。ロダン美術館には、彼の彫刻が建物の内外に鎮座しています。彫刻だけではなく、重厚な建築も含めての美術館です。それらの威圧感をすり抜けながら背筋を伸ばして巨匠と向き合ったのち、屋外に出ると空気が緩みます。まるで公私の切り替えが行われるかのように、緑と青空の下で威圧感は軽減し、作品に興味津々にたわむれる子どもたちが不思議に似合います。モンマルトルではテルトル広場で、絵描きのムッシューたちにまぎってこっそりクロッキー。翌日はアルザスに移動し、「プチット・フランス」の絵本のような街並みの中で一日を過ごしました。残念ながら普段から苦手な風景画はやはりここでもものにできず、不完全燃焼でした。そして、気をとりなおしていよいよロンシャン (Ronchamp) へ。ここには、学生時代あこがれだった建築家ル・コルビュジエ (Le Corbusier) によるロンシャン礼拝堂 (Chapelle Notre-Dame-du-Haut de Ronchamp) があるのです。

実際に足を運んでみると、図版や評論文ではわからなかったさまざまなことが、あらゆる知覚や感覚を通してダイレクトに伝わります。しばしばマッシュルームにたとえられる礼拝堂。見晴らしがよく明るい緑に覆われたのどかな山の頂に、マッシュルームカラーの屋根をかぶせた白くてちんまりとした礼拝堂です。子どもが絵に描いたおうちのように、不規則に散りばめられたいくつもの小窓が見えます。



決して奇をてらったものではなく、すべてに意味があり緻密に計算された上で設計されているのだ、すべては必然なのだと、中に入るとわかります。ぽってりとした白壁にはえる三原色。光の効果を最大限に利用。そして生まれる神聖な空間。それはきわめて素朴で純真で神聖で、作品ではなく礼拝堂なのだと、村人たちの礼拝堂なのだと知りました。緑と空と光と風の中で、この上なく美しい調和を持った教会でした。

←「ロンシャン礼拝堂」のスケッチ

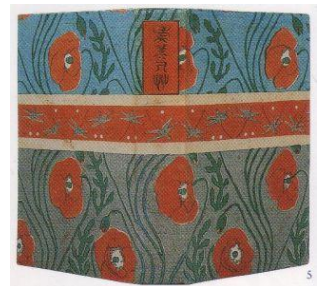


「ロンシャン駅」のスケッチ

会員主催講座・協会催事から

文化講座「ジャメ先生と『虞美人草』を読む」開講のお知らせ

昨年4月に開講しました漱石の『猫』を日仏二カ国語で読む講座は、日本語での作品解説とフランス語でのテキスト解説を組み合わせた「文化講座」として、幅の広いフランス語学習者が受講してくださいました。フランス語を経由することで、かえって漱石の日本語や文学がもつ魅力を再発見する機会ともなり、外国語を学ぶ楽しさを多方面から実感することができました。それもジャメ先生が長年にわたって、地道に漱石の日本語世界と向き合ってきた成果のたまものであり、こうした日仏の異文化理解の礎を築く営みに、あらためて畏敬の念をおぼえた次第です。



『虞美人草』 橋口五葉による装丁

この手ごたえをもとに、今年の4月からは『虞美人草』に挑戦することとなりました。東京帝国大学英文学講師を辞して朝日新聞に入社した漱石が、職業作家としての意気込みをもって、はじめて試みた新聞連載小説です。漱石の小説中まだ仏訳されていない唯一の作品でもあります。漢語を多用した美文体や

勧善懲悪的な物語の結末が批判されることもありますが、あらためて読み返してみると、魅力的な断章がいくつも見出されます。

比叡山・嵐山・保津川下りなどの京都名所めぐり、日本の美術作品や色彩美学へのこだわり、博覧会のイリュミネーションと文明批評、明治のインテリ青年たちと彼らに関わる女性たちの生き方、漱石の文学創造と生き方の哲学等々、興味は尽きません。

明治40(1907)年という時代を映すこの小説に対して、2013年の現在どんな読解ができるのか、実際のところ不安と期待の両方があります。それでも昨年の経験から、漱石のテキストがもつ射程は限りなく広くて深いという確信、漱石の日本語とジャメ先生の仏語訳が合うことで、新鮮な驚きと洞察がもたらされるだろうという予感があります。受講者の側からの読解も歓迎です。当講座に興味のある方は、下記の連絡先までお問い合わせください。

講座開講日程(案)

第1回 4/13: 「屏風に描かれた虞美人草」	酒井抱一の絵画、漱石と日本美術
第2回 5/11: 「比叡山登山」	京都散策、列車の旅、比叡山と富士山
第3回 6/8: 「シェークスピアのクレオパトラ」	詩人の恋愛、色彩の美学
第4回 9/14: 「変わりゆく嵐山」	明治の女性たち
第5回 10/12: 「落第はするけれど・・・」	明治のインテリ青年たち
第6回 11/9: 「博覧会とイリュミネーション」	博覧会と文明批評
第7回 2/8: 「“真面目”の行動学」	文学者漱石の生き方、人情と非人情

- ◆第1回日時: 4月13日(土) 11:00~13:00 ◆場所: 奈良フランス語クラブ(藤原町)
- ◆参加費: 各回 2,000円 ◆テキスト: プリントを配布
- ◆連絡先: ジャメ先生 tel.0742-62-6822 clubfrancenara@kcn.jp
- 又は 浅井直子 tel.:0743-74-0371 E-mail: nasai206@aol.com

フランス映画『最強のふたり』鑑賞記

駒田 奈美

もうご覧になられた方も多いかと思いますが、日本で公開を機に映画『最強のふたり』(2011, 原題: «Untouchables»)を見に行きました。体が不自由な富豪フィリップとスラム街出身の無職の男性ドリスが繰り広げる笑いと感動のストーリーに、最後は温かい気持ちになりました。

資格や経験も全く無いドリスが、いきなり手足の動かないフィリップを介護することになり、最初は戸惑います。しかし介護のマニュアル通りに行動するのではなく、自己流で、ありのままに接するドリス。ときにはフィリップにいたずらをしたり、障害をおちよるような冗談を言いますがそれを一緒になって笑っているふたりは、昔からの親友のようにうつりました。フィリップを障害者扱



いせずひとりの人間として接するドリスの姿勢に感動し、生まれ育った環境、年齢、趣味も違う、本来巡

り合うことが絶対にならないようなドリスを雇ったのは、やはりフィリップの人柄ではないかと思います。この映画ではフランス社会のことも描かれています。フランスに移住する移民は多く、フランスの街を歩いていると多様な人種が共存していると感じます。私がフランスで生活していた際に、歩いているとよく道を尋ねられました。どうして私に道を聞くのだろうと不思議に思いましたが、フランスでは移民も多いので、外国人という感覚があまり無いのではないかと思います。しかし移民に対する就職差別は根強く残っています。ドリスもそのうちのひとりで、なかなか就職できず、職業紹介所に行ってもなかなか仕事を見つけられません。現在、フランスでは失業率が10パーセントを超えていますが、その中でも移民の失業率はさらに高いことがうかがえます。そして、ドリスが好意を寄せるフィリップの秘書マグリ、彼女は同性愛者でした。フランスでは現在、同姓婚の合法化に向けての動きが見られます。フランスでは日本よりも同性愛者が非常に多く、PACS[連帯市民協約]では同姓愛者も税制上で優遇措置が受けられます。『最強のふたり』は笑いと感動のストーリーですが、フランスの社会情勢も組み込まれている傑作ではないかと思います。

シネクラブからのお知らせと「NHKラジオ講座応用編」の紹介

浅井 直子

昨年 11 月以来、会場の都合でシネクラブ例会をお休みしていますが、次回開催は今のところ 4 月 28 日（日）か 5 月 12 日（日）、プログラムは「フレンチ・ミステリー」特集から、ルネ・クレマン『太陽がいっぱい』（1960）、クロード・シャブロール『肉屋』（1970）、ドゥニ・デルクール『譜めくりの女』（2006）のいずれかを予定しています。ご期待ください。

ところで昨年 10 月から NHK ラジオのフランス語講座応用編（木・金）では、「映画の話をしよう！」と題して、フランス映画が特集されています。講師の梅本洋一さんによる映画関係者へのインタビュー（フランソワ・トリュフォー、セルジュ・トゥビアナ、ファニー・アルダン、メルヴィル・プポー、ジャンヌ・バリバール、オリヴィエ・アサイヤス等）の他、映画の話題が満載です。著名な映画人たちの生の声や言葉が聞けることに加え、日常会話例として出てくる表現がまた素晴らしく、フランス語の表現としてだけでなく日本語でも「こんな言い方ができるのね！」などと、感心することしきりです。二つほど例を紹介してみましょう。

< 会話 1 >

- Comment se fait-il que tu aimes autant les films de Kiyoshi Kurosawa ?
- Au début de sa carrière, j'ai pensé que ses films étaient tout simplement des films d'horreur, mais au fur et à mesure que je vois chacun de ses nouveaux films, je me rends compte que ses films montrent la transformation du monde actuel.
- なぜそれほど黒沢清の映画を好きなの？
- 彼のキャリアの最初のころ、彼の映画は単にホラー映画だと思っていたんだけど、1 本ずつ彼の新作を見ていくにつれて、彼の映画は今の世界の変容を示していることが分かったんだ。

< 会話 2 >

- On dit souvent que les répliques d'Ozu sont monotones parce que les personnages se contentent de dire simplement « Bonjour » et « Au revoir ».
- Mais non, il y a des millions de façons de dire « Bonjour » ! Donc pour moi, les différentes façons de dire « Bonjour » chez Ozu sont très intéressantes à écouter.
- 小津の台詞は退屈だと言われているね。登場人物たちは、「こんにちは」とか「さようなら」としか言わないし。
- ちがうわよ。「こんにちは」だって何百万通りの言い方があるの。わたしにとって、小津の作品での「こんにちは」の異なる言い方は、聞いていてすごくおもしろいの。

何気ない台詞の中に、まるで「シネクラブ」を再現しているかのような内容が含まれています。このラジオ講座のおかげで、私たちの日仏シネクラブにも参加希望の問い合わせがありました。私も最初はこの放送のことを知りませんでしたが、問い合わせをきっかけにテキストを揃えて、いまでは応用編だけでなく基礎編からも「なるほど！」と思うようなことを、たくさん教わっています。「初心忘るべからず」 N'oubliez jamais votre enthousiasme de débutant ! ですな。



ジュール・ルナール作『にんじん』を読む

工 藤 順 子



家族、それは「寂しき人々」の群れであることは、ことさら珍しいことではない。ルピック家もまさしくそうである。しかし、当家の「にんじん」の存在は母親の特異性もあり尋常ではない。物語の人員構成は、裕福なルピック家の当主であり知的かつ理性的なルピック氏、ルピック夫人、長女エルネスチヌ、長男フェリックス、次男にんじん、女中達、愛犬ピラムである。《にんじん》の呼称は、人参のように赤茶けた頭髮、顔にはそばかすがあり、まるで「クル病」かと思うほど醜い容姿であることから、母親が名づけたものだ。本当の名前は、家族でさえすぐには浮かんでこない。

「どうして、にんじんなんてお呼びになるんですか？ 髪の毛が黄色いからですか？」するとルピック夫人は言う。「根性はもっと黄色いですよ」

この作品は約 50 章の短い話から成る。最初の話「鶏」の一部を簡単に紹介してみよう。広い中庭のずっと奥のほうに鶏小屋の小さい屋根が暗闇の中に、戸の開いているところだけ黒く四角く区切っている。何もせずに遊んでいたにんじんは、立ちあがりおどおどしながら「だって母さん、僕だってこわいよ」

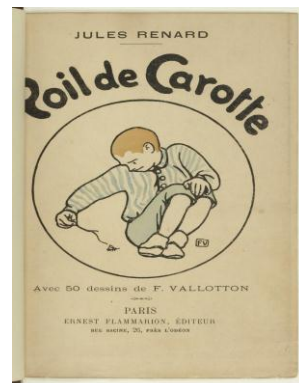
「フェリックスや、お前ちょっと行って閉めてくるかい」フェリックスは断る。「じゃ、お前は、エルネスチーナ？」「あら、母さん、あたしこわいわ」二人とも机の上に本を広げて読みながら、ろくろく顔さえ上げないで返事をする。「そうそう、なんてあたしや馬鹿なんだろう」ルピック夫人は言う「すっかり忘れていた。にんじん、お前行って鶏小屋を閉めておいで」。テーブルの下で何もせずに遊んでいたにんじんは、立ちあがりおどおどしながら「だって母さん、僕だってこわいよ」。「なに？」「大きななりをして…嘘だろう。さ、早く行くんですよ」とルピック夫人。姉と兄からおだてられて、にんじんは怯む心と闘う。危険はもう過ぎた。にんじんは両親の顔色の何処かに心配した跡が見えはせぬかと探している。

ルピック夫人は落ち着き払った声で言う「にんじん、これから毎晩、お前が閉めに行きなさい」。我が子ににんじんに徹頭徹尾つれなく相対せざるを得ない母親もまた哀れである。

つづいて「パンのかけら」の話の一部を紹介しよう。或る日ルピック夫人は大変な事をしでかした。慣例を破ってじかにルピック氏に言葉をかけたのだ。「パンのかけらを一つこっちへ頂戴。砂糖煮をたべちまうんだから…」ルピック氏は驚いて躊躇しているが自分の皿からパンのかけらをつまみ上げ、真面目に、無愛想にそれをルピック夫人めがけて抛ったのである。娘や息子の前で、人間の屑みたいに扱われた母親。にんじんはどうかと言うと、ピリッとも身動きせず、唇を壁土のように固くさせ、耳の奥がごろごろ鳴り頬つたを焼き林檎で膨らませながらじっとしている。

にんじんは頭脳明晰で優秀な少年である。にんじんだって幸せの光は見えるのだ。「父さんはお前を愛してるよ」とルピック氏はにんじんに告げる。「僕 母さんは大嫌いだ。僕は職業を持つ。そしてこの家を出る」と自分自身で人生を切開く決心を父に告げる。

『にんじん』(Poil de Carotte, 1894 年, 岸田国士訳) は著者ジュール・ルナアルの自伝的作品である。繊細で詩的な、またユーモラスな感覚があふれている。短い文の中にすべてが凝縮されて語られている。私はハンカチを用意して泣きながら読んだ。「にんじん君、私は君を愛してるよ！」



Junko のパリ便り <12>

<<ガレット・デ・ロワ>>

galettes des rois

高橋潤子

▼クリスマスシーズンが過ぎると、パン屋の店先には様々なサイズのガレットが並ぶ。ガレットとは、一般的には丸いパイ生地で、フランジパンと呼ばれるアーモンドパウダーでできたペーストを包んで焼いた菓子だ。フランジパンの代わりにりんごの砂糖煮を入れてアップルパイ風にしたものや、フルーツやチョコレートクリームの入ったものもある。いずれも購入するとき金色の紙の冠をつけてくれる。ガレットによって王を選ぶためである。



▼ガレットの中には陶器でできたフェーヴ(fève)が入っている。元来はそ



ら豆を利用していたのが、18 世紀頃から陶器製が主流になった。古代ローマ人たちは、冬至の祭でもあるサトゥルヌス祭の時、そら豆を1つ入れた菓子を切って参加者に配り、そら豆が当たった人を1日だけの王としたという。それが東方の3人の王がイエスの元を訪れたことを祝う公現祭* (フランスでは1月の第1日曜日) と結びついて現代に伝わっている。* Epiphanie (フェーヴ: 左の写真の動物)

▼中に入っているフェーヴは、やはりイエスの誕生に関する形をしているものが多い。赤ん坊イエス、マリア、牛や羊、東方の王などだ。全種類集めるとイエスの生誕や、3人の王の来訪の場面が再現できる。他にもフランスの地方や職業に関するもの、サッカーチームのマーク、テレビアニメや人気漫画の登場人物などなど、実に様々なフェーヴがあり、

色々集めるコレクションマニアもいる。店によっては売り上げ増大を期待して金の指輪やナポレオン金貨を入れるところもあり毎年のようにニュースで取り上げられている。▼ところでガレットの切り分けというのが意外に難しい。切っている時にナイフがフェーヴにあたってしまうことが多いため切り口からフェーヴがのぞくこともある。そこで列席者のうちで最年少の者が、後ろを向いたり目隠しをしたりしてガレットを隠し、切り分けた人が「これは誰のもの？」と皿をかかげるたびに、受け取る人を指名するということがよく行われる。子供たちが小さいころは、わが家では家庭内のもめごとを避けるため、最低2回はガレットを食べ、子供たちが1回ずつ女王様になれるよう、わざとフェーヴ入りの一切れが当たるようにしていた。▼ちなみにガレットと共に飲まれる飲み物としてはシードルが圧倒的に多い。

また、公現祭の日だけに限らず、このシーズンには事あるごとにガレットが登場する。職場や友人の集まり等でもよく出されるし、学校給食のデザートにも小さなガレットがでて、運のいい子はフェーブに当る。ガレットを皆で食べないと一年が始まらないくらいに思っている地元の人も、周囲だけで何人もいる。この時期パリの人々の集まりに呼ばれたならば手土産はガレットかシードルを持参すればまず間違いないかも。

フランス語講座の仲間たちとの再会

蘭田 章 恵

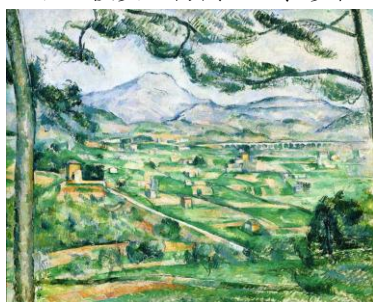
私が奈良日仏協会の会員となったのは 18 年以上も前のことだ。フランス語を自宅の近くで習いたいという気持ちで、電話をかけたことから、永いお付き合いが始まった。フランス語を習うなら、京都の関西日仏学館、大阪の大阪日仏学院、アリアンス・Fr. があったが、自宅からは遠く、軽い気持ちで習い始めるには敷居が高かった。当時の奈良日仏協会には、フランス語講座が豊富に開講されていて、その中から自分の通える日時とレベルを選ぶことが可能だった。

講座以外にも様々なイベントがあり、仏人作家のフィリップ・トゥーサンや領事を招待したり、フランス人によるお茶会などがあった。そんな時にはいつもフランス語講座受講生が数人ボランティアでお手伝いをしていた。お互い習っている曜日や時間は違っていたが、イベントの手伝いとして会うことが多くなり、プライベートでの付き合いが始まった。イベントの手伝いはしても皆受講生で、「語学を学ぶことが基本」という暗黙の了解がありフランス語の上達という向上心を持つ仲間だった。

私が教わっていた高橋節子先生は、月に 1 度ネイティブと話す機会を与えて下さった。その時に習ったのがクリステルだ。彼女は高校生のときに交換留学生として来日し、能や日本人形作りも達者である。来日する外国人が、日本人以上に日本文化についてよく知っていて、私たちが恥ずかしく思うことがよくあるが、彼女もそんなひとりだった。彼女は日本人と結婚し娘 2 人が生まれて、今はフランスで暮らしているが、昨夏クリステルがバカンスで来日してきた。高橋先生が「クリステルを囲む会」を呼びかけたところ、13 人

上もの元受講生が集まった。クリステルと会って近況を聞きたいという気持ちと、講座の仲間のその後のことを聞きたいという気持ちの両方を叶えることができ、懐かしい同窓会となった。

ある時期この講座に通っても、長く続けられる人はそれほど多くはない。留学や仕事に必要な人は短期間で巣立っていく。3 年以上も同じクラスで続けると同志のような気持ちになる。新年早々、その同志のような同窓生との再会が実現できた。行動的な彼女はフランス語講座で語学力に磨きをかけて、もともと専攻だった芸術を学ぶため、9 年前にエクス・アン・プロヴァンスの大学に留学した。その頃、彼女を訪ねてゴッホやセザンヌが過ごした南仏と一緒に回ったことは、いい思い出になっている。2 年前、彼女は仕事を通じて知り合ったスペイン人と結婚し、子どもが生まれ、先日奈良の実家に御主人と共に帰省してきた。久しぶりに彼女と再会して、現在のヨーロッパの事情、EU



セザンヌ『サント・ヴィクトワール山』(1886-87)

におけるスペインやフランス事情について語り合った。講座の仲間たちと、これからまたいつどこでどんな風な再会があるのかとても楽しみだ。

仏訳日本の古典ひろい読み <1>

Le Dit de Genji (Livre III)

<Utsusémi (La Mue de la Cigale)>

Le Prince Genji entra, et fut agréablement surpris de trouver une femme seule. Il retira la couverture, et quand il fut tout près, il lui sembla bien qu'elle était mieux en chair que l'autre nuit, mais nul soupçon d'abord ne l'effleura.

Cependant, cet abandon dans le sommeil ne ressemblait guère à celle qu'il cherchait, et peu à peu, la vérité lui apparut ; il se sentit déçu et frustré, mais il eût été malséant de laisser deviner qu'il s'était trompé sur la personne, et elle s'en fût étonnée à coup sûr. (ルネ・シフェール氏訳)

【解説】 源氏の君さえ意中の女性(空蟬)には、まんまと聞(ねや)の直前で逃げられ残ったのはその抜け殻と傍で寝てい

た大柄(もののしい)娘でした。こんな失意の青春時代も……。源氏今 17 歳、彼のストーカー癖は、このあと夕顔を初めとして、延々と続くことになります。(文責：中浦)

読者の大多数の方はフランス語の方が解りやすかったのでは……。

「古文原文」源氏物語 3「空蟬」

君は入りたまひて、ただひとり臥したるを心やすく思す。

衣を押しやりて寄りたまへるに、ありし気配よりは、もののものしくおぼゆれど、思ほしうも寄らずかし。

居きたなきさまなどぞ怪しく変はりて、やうやう見あらはしたまひて、あさましく心やましけれど 人違へと、たどりて見えむも、をこがましく、あやしと思ふべし

◆111 回フランス・アラカルト

英仏会話教室エコール・キッズの経営者ローラン・ソルベさんを迎え第111回フランス・アラカルトを開催します！

Laurent SORBETS さん (42 歳)

2002 年から英仏会話学校・翻訳会社 ECOLE KIDS を経営。

日英同時通訳やテレビ番組の翻訳、吹き替えに従事した経歴もある。(下記枠内に詳細)

いつものように手作りのケーキと名物紅茶の香りを楽しみながら…仲井理事のギターに合わせて、フランス語による詩の朗読。今後アラカルトは少し衣替える予定。乞ご期待

●日時: 3月14日(木) 15時から

○会費: 会員千円、一般 1500 円(お菓子とドリンク付き)

●場所: カフェ“Mardi Mardi” (マルディ・マルディ)

奈良市登美ヶ丘3-12-9 登美ヶ丘ビル1F

(TEL&FAX : 44-5701)

学園前駅からバス: 7 分、西登美ヶ丘 2 バス停前

[P]有り

サイト <http://mardimardi.exblog.jp/11477753/>

※参加申し込みなどは末尾の日仏協会事務局へ



奈良日仏アラカルト今&昔 (1)

“Mon Nara”の誕生ほか

(仲井秀昭 記)

Mon Nara と題した exposé を書いたのは

故須田紘太元副会長 (元奈良教育大副学長) でした。

東京出身の須田さんが緑溢れる奈良の地に来て生活を始めたときの率直な感想。奈良フランス語クラブでは毎月出席者がフランス語の作文 [exposé] を提出、それをめぐってフランス語の討論。例会のお知らせや会員間の情報交換用に会員通信を始めましたがそれが《Mon Nara》の発端でした。何年かたって奈良日仏協会を立ち上げたときもそのまま継続しました。(以下次号)

ローラン ソルベ氏 (42 歳)

日本語能力試験1級！英伊西語を話し、南フランスのエクサン・プロヴァンス大学で、英語翻訳と文学を学んだあと日本語と日本文化学士課程修了。米・ワシントンのウィットワース大学に交換留学、母校の大学に戻ってイタリア語学と映像学修了。1994 年からフランス空軍で訓練参加。1996 来日。NOVA 講師を経て、ベルリッツや特許事務所で翻訳業務。帝国ホテル勤務、英仏同時通訳(国連会議、検察庁、等)。

編集後記

▼いよいよ協会も2013年度がスタートし、去る2月10日には総会と懇親会が開催されました。会長のあいさつにありますように新年早々にはアルジェリアで日本人が関わる悲惨な事件がありましたが旧仏領であった国だけに皆様も大きな関心を抱かれたと存じます。小生かつてモロッコのカサブランカなどに旅したことがあります。日本と同緯度なのに赤茶けた砂漠が国道に沿って続き、南下するにつれ地平線から山脈の頂上が現れるのを不思議に思ったものです。▼隣国アルジェリアに入るには当時は一度マルセイユなどに戻る必要がありましたが、今はどうか？・・・当協会はフランス並びに仏語圏住民との交流とありますので、ぜひこの方面での見聞録や記事などのご投稿お願いしたく存じます。▼寄稿文を見て以前から疑問に思っていたのはパリに居られる日系の方がパリ市民を「フランス人」と呼ばれるのは如何なものでしょう。パリは人種のデパートのような街。Européen のことをフランス人と言うのは再考の余地がありそうです。

(T・中浦)

2013 年度会費納付のお願い(事務局)

奈良日仏協会では、日仏文化交流とともに会員の皆様楽しんで頂けるような活動を目指し、モンナラ発行や様々な催しを企画、開催しております。同封の振り込み用紙にて年会費納入をお願いいたします。

本誌への投稿[特に新鮮で多様な話題など]を歓迎します。誌面の都合で意味を変えずに表現を変えさせていただくことがあります。

締切日: 次号は3月末日が締切日です。

Mon Nara JAN.-FEV. 2013 1 - 2月合併号 Numéro254

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP: <http://www.afjn.jp> E-mail: afjn_info@kcn.jp TEL&FAX 0743-52-3939

〒630-8691 奈良中央郵便局 郵便私書箱第30号[郵便物のみ] 発行責任者: 坂本成彦